

選評

望月典子

ニコラ・プッサン作《バッコスの勝利》と《パンの勝利》

リシュリュー城「王の陳列室」の装飾における意味について

本論文は、プッサンがリシュリュー城「王の陳列室」のための対作品として制作した2点の神話画について、政治的な背景を重視する近年の研究動向に立脚しながらも、それらをさらに精査・深化させ、新たな図像解釈によって斬新な結論を提示することに成功した、非常に大きな視野を有する意欲的な論文である。国際的な水準に照らしてもきわめてすぐれた成果であるといえる。望月氏は、軍事的勝利者としての側面を強調して酒神が描かれた《バッコスの勝利》においてルイ13世による軍事的偉業が称揚されていること、またバッコスのインド遠征に付き従ったパンを主人公とする《パンの勝利》において、ルイ13世を支えた注文主のリシュリュー枢機卿の政治的偉業が顕彰されていることを、説得力をもって論じている。

しかし本論文の射程は単にプッサンの2作品の図像解釈にとどまらない。すなわち、プッサン作品が、同じ「王の陳列室」に飾られていたマンテーニャらによるルネサンス絵画5作品と形式のおよび意味的にも関連することを的確に指摘することにより、15世紀イタリアの作品が時と場を異にする新たな居場所で、プッサンによる2点の神話画とともにいかに新たな意味を紡ぎだしたかを、注文・制作・受容の各方面を考慮しつつ、見事に明らかにしているのである。

以上を論じる望月氏の方法論は、大量の同時代文献・図像資料の渉猟に基づき、それらの的確な引用を丹念に積み重ねていくことによって、個々の作品あるいは複数作品の相関の綾に込められていた政治的意図を浮かび上がらせるという、極めてオーソドックスな、美術史学の王道を行くものであるといつてよい。ただ、このように多くの素材によって編み上げられた本論文は、学会誌の定められた紙数に収めるべく議論を切り詰めたのか、十分に説明が尽されていないように思われる箇所も若干見受けられたが、それも本論文のスケールの大きさゆえとみなすべきであり、大きな瑕というにはあたらないと判断された。

今後、望月氏によって、プッサンの他の作例についても、本論文で展開された問題意識に基づく研究が進展し、既存の主題から、展示空間における「配置」によって新たな意味を創り出すというこの大画家の創作の秘密が一層解明されていくことが期待される。以上により、望月典子氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称えたい。